

ヨーロッパ諸語における口蓋化

Palatalisation dans les langues européennes

下 宮 忠 雄
Tadao SHIMOMIYA

ヨーロッパ諸語における口蓋化の現象を、他の論者のようにそのメカニズムにおいてではなく、具体的な若干の言語の例について検討し、傾向と一般化のようなものを探り出せるかどうかを考えてみる。

1. 口蓋化の定義：(Bussmann 1983 に多少手を加える) 共時的には、舌先を硬口蓋に接近させて子音を産出すること；通時的には、後続の i 的母音または j により子音・母音が同化 (Assimilation) すること。共時的な例はフランス語 *garçon* やノルウェー語 *berg* 「山」の *g* [g'] に見られ、ギャルソン、ベルギのように発音される。また、アルバニア語 *mik* 「友人」 (<ラ *amicus*) の複数 *miq* [k'] (<ラ *amici*) はヨーロッパにおける数少ない /k/ : /k'/ の音韻対立の例である。通時的な例は以下に豊富に見られる。本稿において扱われるのは主として通時的な場合である。

2. 印欧諸語の場合、歴史的には東方のグループ (サテム諸語=サンスクリット・イラン・バルト・スラヴ諸語等) に最も早く生じた。印欧諸語分類の基準の一つとして有名である。印欧祖語 **k̑m̑tóm* 100 →

[k] > [s] 系音：サ *śatám*, リ *šim̑tas*, ロ *sto*

[k] > [k] 音：ラ *centum*, ギ *hekátón* (ゲルマン語 *hund* は [k] > [h])

Hjelmslev (1972) はその印欧語音素体系 (p. 128) において *idg. k̑ k kw* を *k₁ k₂ k₃*

と表記し、簡略にまとめている。

k₁ > *s, š* (上記 *śatám* 等)

k₂ > *k* (ラ *caecus*, 古アイルランド *caech* 「一つ目の, 片目の」, ゴ *haihs*, サ *kekara-h* やぶにらみの)

k₃ → *kw, p, k* (ラ *quis, quid*, ギ *póteros*, オスク *pis*, アイルランド *pis*, サ *ka-s*, 古教ス *kū-to*, リ *kàs*)

3. 口蓋化は普遍的な現象として、いつの時代にも、どの言語にも起りうる。印欧祖語からラテン語にいたる過程には起こらなかったが、ラテン語 *centum* からロマンス諸語成立の過程において、イタリア語 *cento* の [tʃ], フランス語 *cent* の [s] (古代フランス語は [ts]), ポルトガル語 *cento* の [s] には口蓋化が生じている。ルーマニア語の *sută* はスラヴ語からの借用である。サルデーニャの *Logudorese* 方言 *centu* には生じていない。

西ゲルマン語 **kirika* 「教会」 (ギ *kyriakón dōma* 「主の家」の *dōma* 「家」の省略より) はスコットランド方言 *kirk* (cf. 人名 *Kirk Douglas*) においては口蓋化が起こっていないが、標準英語 *church* にはイタリア語の場合と同じ変化が語頭と語末に見られる。

印欧祖語 **dyeus* (サ *dyáuḥ*) 「天神」 → ギ *Zeus* ギリシア神話の最高神。このギリシア文字 *z* は音価 [zd]

で、後に [z] となった (W. Brandenstein 1954, p. 94)。*pantja, *medhios, *trapedja → ギリシア語 pāsa 「すべて, 女性」, mēsos 「中央」, trápeza 「テーブル」; 古典ギリシア語 douleíā, néos → 現代ギリシア語 douleíá [ðuljá] 「仕事」, nios [nios] 「新しい」においては [lj] [nj] の口蓋化が見られる。

4. アルバニア語はサテム語の一つであるが, *k̑m̑tóm 「百」は quind となり, *k 音の扱いがサンスクリット語と異なっている。*kw- (前舌母音および y の前で) が s になる。*kwey → ア si 「いかに」, *gwēniā → ア zonjë 「女主人, 婦人」, *okwi- → ア sy 「目」。ブルガリアのゲオルギーエフ (Vladimir Georgiev, 1976, p. 229) は, ブルークマンらの 3 系列と異なり, 印欧祖語に *k と *kw の 2 系列の喉音 (Gutturale) を推定している。ラテン語からアルバニア語に借用される場合に, 口蓋化がしばしば見られる。例は Haarmann 1972 より: gaudium → ア gaz 「喜び」, magister → mjeshtët 「教師」, novercu → njerik 「義父」, sanctu → shënt 「聖者」, sanitāte → shëndét 「健康」, sociu → shok 「友人, 仲間」, spissu → shpesh 「しばしば」, strātum → shtrat 「ベッド」(最後の二者は中世ドイツ語から近代ドイツ語に生じた音変化 [s] → [ʃ] と同じである)。

5. ヨーロッパ諸語のうち口蓋化が最も顕著に見られるのはスラヴ諸語である。そこでは p:p'/t:t'/k:k' 等の Palatalitätskorrelation (Trubetzkoy 1939 の用語) があり, R. Jakobson によれば, この現象はポーランドからモンゴルにいたる広い地域に見られる (ヨーロッパ言語連合 europäischer Sprachbund の一事象)。ロシア語 mat 「マット」 ~ mat' 「母」, govorit 「彼は話す」 ~ govorit' 「話す, 不定形」(Saussure の例, p. 165) のように, 非口蓋化: 口蓋化が音韻対立をなしている。ロシア語 stena 「石」のような場合, 口蓋化は t から更に s にまで及び, [s't'ena] のようになる (Hjelmslev, Trubetzkoy)。これは共時的現象である。

スラヴ語の歴史文法によれば (Bräuer, Bd. 1, p. 186 ff.), そこでは口蓋化は 3 度にわたって起こった。第一次 (g > ž: bogŭ 神 > bože 神よ; k > č: pekŭ 私は焼く > pečetŭ 彼は焼く; ch > š: ucho 耳 > uši 複数); 第二次 (g > z: bogŭ 神 > bozi 神々; k > c: ruka 手 > rucě 手において; ch > s: mucha 蠅 > musě 蠅に); 第三次 (k > c: *oviká 羊 > ovica)。ロシア語 den' 「日」とポーランド語 dzien を比べると, 後者のほうが, 口蓋化が進んでいる。この語頭音の相違は educate の英音 [-dj-] と米音 [-dʒ-] の相違に当たる。

6. ロマンズ語・ゲルマン語の場合は, 言語により口蓋化に対する好み異なる。口蓋化の度合いの異なる例として, ラテン語 nātiō に由来するイ nazione, ポ nação, フ nation, そこからの借用である英語 nation ([sj] > [ʃ]) をあげておこう。ポルトガル語 bom dia とスペイン語 buenos días を比べると, 前者は後者よりも口蓋化に対してより敏感であることが分かる。ただし, 歴史的には, ポ ano ~ ス año, ポ cavalo ~ ス caballo のような場合を見ると, むしろ逆である。

Pottier (1988, § 70) は口蓋化の主要原因である yod に 4 種を区別している。

yod 1: fortia > fuerza

yod 2: oculu > [og'lo] > [oi'lo] > [ožo] > ojo

folia > hoja

yod 3: podiu > [podjo] > poyo

yod 4: octo, nocte, factu > ocho, noche, hecho

7. ゲルマン語の場合, church, ド Kirche, オ kerk, フリ tsjerke, デ kirke, ス kyrka, ノ kirke を見てみよう。英語は語頭・語末とも口蓋化が見られ, フリースランド語は語頭に口蓋化が見られる。フリースランド語は, 少なくともオランダ語よりは口蓋化音が多く, tsien (オ tien 10), tsiis (オ kaas, ド Käse チーズ) 等の例がある。tsjinst 奉仕, tsjok 厚い, meitsje 作る, smeitsje 味わう, laitsje 笑う, lizze 横たえる, などは, 対応するオランダ語 dienst, dik, maken, smaken, lachen, leggen, ドイツ語 Dienst, dick, machen, schmecken, lachen, legen にない口蓋化を含む。スウェーデン語とノルウェー語の語頭は, 閉鎖音から摩擦音に変わり, ドイツ語の -ch- の音になっている。ゴート語 satjan 「置く」, 古代ノルド語 setja などの j は, 西ゲルマン語においては子音重複 (westgermanische Konsonantengemination) を起こしている。OE settan, OHG sezzan において, ドイツ語にのみ口蓋化が生じている。同じくドイツ語 Tochter [tɔxtər] 「娘」の複数 Töchter [tœçtər] においては, 幹母音 [ɔ] が前舌母音 [œ] になるため, 子音も [x] から [ç] に口蓋的になる。

8. アイルランド語にも硬子音: 軟子音 (broad and slender consonants という) の対立が見られる (Dillon):

bó [bo:] 牛 ~ beo [b'ɔ:] 生きて

bog [bo:g] 軟らかい ~ beag [b'ɔ:g] 小さな

maoin [mi:n'] 富 ~ min [m'i:n'] 滑らかな

labhair [lour'] 話す ~ leabhair [l'our'] 本, 複数

bád [ba:d] 船, 単数主格 ~ báid [ba:d'] 単数属格・複数主格

bhíos [v'i:s] 私は... だった ~ bhís [v'i:j] 君は... だった

口蓋化は, páirc [pa:rk'] 野原, tigh [t'i:g'] 家, scríobhaim [ʃgr'i:m'] 私は書く, におけるように, 子音の前後に, あるいは子音を1個飛び越えて, 口蓋化が生じており, 上記第5項のロシア語 stena と同じような現象が見られる。

9. 共時的観点から, イタリア語とロシア語の paradigm において口蓋化の起・不起に関して興味あるパラレルを発見した。以下, とともに直説法現在の人称変化で, 2. 3. 4. 5. の個所に口蓋化が起こる。

イタリア語 reggere 支配する

ロシア語 moč' (<*mog-ti) 出来る

1. regg-o 4. regg-iamo

1. mog-u

4. mož-em

2. regg-i 5. regg-ete

2. mož-es'

5. mož-ete

3. regg-e 6. regg-ono

3. mož-et

6. mog-ut

(leggere 「読む」も同様)

(leč' 「横たわる」も同様)

類似の音的環境にある古典ギリシア語 lég-o, lég-eis, lég-ei, lég-omen, lég-ete, lég-ousi (不定形: lég-ein 言う) には起こらない。現代ギリシア語においては, 母音間の g が消えて, leo, leis, lei, leome, leete, leun となる。同様に, ドイツ語 tragen 「運ぶ」の接続法現在 trage, tragest, trage, tragen, tragete, tragen においても, 口蓋化は見られない。

一方, イタリア語の pagare (支払う) の直説法現在 pago, paghi, paga, paghiamo, pagate, pagano, 接続法現在 paghi, paghi, paghi, paghiamo, paghiate, paghino, や toccare (触れる) の直説法 tocco, tocchi, tocca, tocchiamo, toccate, toccano, 接続法 tocchi, tocchi, tocchi, tocchiamo, tocchiate, tocchino などは不定形の子音を統一しようとする努力が見られる。フランス語 changer, manger の1人称複数 changeons,

mangeons についても同じ傾向が見られる。

10. 以上に掲げられた実例を検討しながら、まとめてみよう。

口蓋化は、子音の調音点が前方に移動することである。英語 keep, cape, cap, cop, cope, coop の語頭音を比べた場合、keep の k は、なるほど [k] 的ではあるが、この k を口蓋化の例とは言わず、keep が cheap になった場合に、始めて口蓋化が起こったと言う。ラテン語 caupō (商人、酒屋の主人) から来たドイツ語 Kauf, オランダ語 koop, デンマーク語 køb (以上「購買」、派生語 kaufen, kopen, købe「買う」)、ロシア語 kupit'「買う」には語頭音に口蓋化が起こっていないが、英語においてのみ口蓋化が起こった(古代英語 cēap 商売、売買)。口蓋化の起・不起は言語の好みによる。上記の場合について言えば、古英においては、母音 a の位置が(他のゲルマン語に比して)上げられる。cf. ゴ dags, 古ノ dagr, 古高ト tag に対し古英は dæg となる。

口蓋化を受ける子音は、t, d, k, g (ロマンス語, ゲルマン語)が多いが、イタリア語, スペイン語, ポルトガル語, 現代ギリシア語では l, n についても起こる。ロシア語, アイルランド語では、その他についても起こる。

口蓋化した子音は、Affrikat → Assibilation の過程を取る(フ [tsāt] → [sā]; [tšāte] → [šāte])。Affrikat のままとどまる(イ cento)か否かは、言語の好みによる。

同じ音的環境(phonetic environment)にありながら、口蓋化が起こったり起こらなかったりする。それを決定するのは言語の音韻体系による(上に、言語の好みと言ったのは、このことである)。古典ギリシア語 lég-ei (彼は言う)、ドイツ語 er sage (彼は言う、接続法)においては [g] のままであるが、イタリア語 regg-e (彼は支配する)、legg-e (彼は読む)においては [dʒ], ロシア語 mož-et (<*mog-et), bož-e! (神よ、呼格 <*bog-e) においては [ʒ] となる。イタリア語では綴り字を変えていない点、ロシア語のほうが表音的である。ゲルマン語の中では、英語はドイツ語よりも口蓋化の傾向を多分にもち(church ~ Kirche, ドイツ語には [ç] の音素があるにもかかわらず)、フリースランド語はオランダ語よりも口蓋化が多い(tsiis ~ kaas チーズ)。

パラダイムを統一化しようとする働きと、歴史的条件に拘束されている場合が並存する(イ pago, paghi ~ reggo, reggi)。古代ロシア語 ruka「手」の所格 rucě「手において」(第2次口蓋化)は今日 ruke に統一している(パラダイム化している)が、古代教会スラヴ語 rōka「手」→ rōčika「小さな手」(第1次口蓋化)は、今日のロシア語でも ruka → ručjka [ルーチカ] のままとどまっている。

口蓋化の原因が i, j であることはすでに述べたが、この調音前方化と反対の方向である、調音後方化もまれに起こる。ゲルマン語の比較文法では Palatalisierung を i-Umlaut と呼び、その逆方向を Velarisierung (u-Umlaut, 唇音化)と呼んでいる。古代ノルド語 taka (取る) → tekr (<*tak-ir 彼は取る)は i-Umlaut の例であり、tōkom (<*tak-om 私たちは取る)は u-Umlaut の例である。u-Umlaut は現代アイスランド語(古代ノルド語の現代形、人口24万)ではいままも生産的に行なわれる。しかし、ロマンス語などの場合と異なり、tekr が tečr とはならない。

ドイツ語では a, o, u が(次音節の前舌母音により) ä, ö, ü と前方向に進み、ギリシア語も ē, ei, oi, y が現代語ではすべて [i] になる(psykhé, oinos, eirénē → psixhi 精神, inos ワイン, irini 平和)。ノルウェー語も bok [bo:k] → [bu:k] 本, hus [hu:s] → [hu:s] 家, のように調音点が前方に移動する。これら前方指向の行き過ぎは二重母音化(英 mīn, hūs → mine, house; ド mīn, hūs → mein, Haus; オ mīn, hūs → mijn, huis)などによって調整される。また、スペイン語 ojo [ožo] → [oxo] は後方化の例である。

Résumé: Autrement que les autres discutants qui traitent du mécanisme de palatalisation, le présent article tente d'en dégager quelques tendances générales (*drift* de Sapir) en examinant des exemples de diverses langues européennes. Il y a des langues qui sont susceptibles à la palatalisation, et d'autres qui ne le sont pas (on dira en allemand de palatalisationsfreudige bzw. -empfindliche und palatalisationswiderige bzw. -negative Sprachen). Dans le groupe germanique, l'anglais y est plus susceptible que l'allemand, le frison plus que le néerlandais, le norvégien plus que le danois (ski [ʃi:] ~ [ski:], gjerne ~ gerne). Dans le groupe roman, on aperçoit (synchroniquement) la palatalisation en portugais *bom dia*, tandis qu'en espagnol *buenos días* on ne l'aperçoit pas; diachroniquement, pg. ano, cavalo (sans palatalisation), mais esp. año, caballo (avec palatalisation), en italien terra, mais en roumain țară (avec palatalisation). Dans le même milieu phonique, la palatalisation se produit en italien (regg-e) et en russe (mož-et 'il peut'), mais elle ne se produit pas en grec (lég-ei) et en allemand (er sage 'qu'il dise'). Ce qui décide 'elle se produit ou non' est le développement individuel et le système phonologique d'une langue donnée. Historiquement, elle se produit le plus tôt en indo-iranien, en balte et en slave. On aperçoit la palatalisation le plus systématiquement en slave (opposition de palatalisé: non-palatalisé, Korrelationsbündel, Trubetzkoy), qui est un trait de l'union linguistique eurasiennne, R. Jakobson). La palatalisation est un phénomène plus ou moins universel, i. e. qui peut se produire dans n'importe quelle langue et dans n'importe quel temps.

[参考文献]

- Brandenstein, W.: Griechische Sprachwissenschaft. Bd. 1. Berlin 1954.
- Bräuer, H.: Slavische Sprachwissenschaft. Bd. 1. Berlin 1961.
- Busmann, H.: Lexikon der Sprachwissenschaft. Stuttgart 1983.
- Dillon, M.: Teach Yourself Irish. London 1962.
- Georgiev, V.: Probleme der historischen Lautlehre des Albanischen. Die Vertretung der ide. Gutturale und der sonanten Nasale. In: Akten des Internationalen Albanologischen Kolloquiums. pp. 223-234. Innsbruck 1976.
- Haarmann, H.: Der lateinische Lehnwortschatz im Albanischen. Hamburg 1972.
- Hjelmslev, L.: Sprogssystem og sprogforandring. TCLC 15, Copenhagen 1972.
- Jackson, K.: Palatalisation of Labials in the Gaelic Languages. In: Beiträge zur Indogermanistik und Keltologie. J. Pokorny zum 80. Geburtstag gewidmet. pp. 179-192. Innsbruck 1967.
- Lausberg, H.: Romanische Sprachwissenschaft. Bd. 1. Berlin 1969.
- Lehnert, M.: Altenglisches Elementarbuch. 3. Aufl. Berlin 1955.
- Pottier, B.: Langue espagnole. Eléments de grammaire historique. Paris 1988.
- Rossetti, A.: Brève histoire de la langue roumaine des origines à nos jours. Mouton 1973.
- Saussure, F. de: Cours de linguistique générale. 3. Aufl. Paris 1955.
- Schmitt, R.: Grammatik des Klassisch-Armenischen. Innsbruck 1981.
- Sipma, P.: Phonology and Grammar of Modern West Frisian. Oxford 1913.
- Thumb, A.: Grammatik der neugriechischen Volkssprache. Berlin u. Leipzig 1915.
- Trubetzkoy, N. S.: Grundzüge der Phonologie. 2. Aufl. Göttingen 1958.